



鳥フルの怖さ、忘れずに

小 松 守

(秋田市大森山動物園 園長)

いろいろなことを経験した長い動物園人生だったが、昨年初冬に大森山で発生した高病原性鳥インフルエンザ（以下、鳥フルと略）は、私にとって強烈すぎる、そして心底苦しめられた出来事として生涯忘れることのできないものになった。何かにつけ、折に触れて思い出す。

先日訪ねたメルボルン、ヤラ川の岸辺で遊ぶ野生のコクチョウを見て、鳥フルで死んだコクチョウのことを思い出していた。

鳥フルとの戦いが始まった11月15日の午後だった。休日の午後、鞆の中でずっと静かにしていた私の携帯電話が大音量で鳴り出した。発信元は動物園のM獣医師だった。動物に何かがあったかと胸騒ぎを覚えながら電話に出ると、沼から動物病院に移し飼育していた3羽のコクチョウのうち1羽が死亡、鳥フル簡易検査で陽性反応が出たというのだった。

動物病院は園東端の施設、問題のコクチョウは病気でいたのではなく、沼護岸工事で病院の一室に仮住まいしていただけの鳥だった。

「…うっ…」、すぐには返す言葉が見つからなかった。ただならぬ事態への展開を直感し、胃袋がキリリと絞めつけられたのを覚えている。

「わかった。すぐ行く。関係方面への連絡を頼む」、そう伝え車を走らせた。園に着くまで、頭の中でいろんなことがグルグル回っていた。どうして？まず何をすべきか？最悪の場合は？などなど、交錯する不安要素は恐怖へと増幅し

ていった。

人も鳥もインフルエンザにかかるが、それぞれ別のタイプのウィルスで、鳥のインフルエンザウィルスは人に感染しないとされているようだ。この感染症の恐さは、養鶏場で発生すると法律で全部殺処分が決められている。甚大な被害になる。6、7年前には西日本各地の養鶏場で鳥フルが猛威を振るい、白い防護服を着た作業員の鶏殺処分情景がTVで放映されるたび、国民は強い恐怖感を植え付けられた。

動物園の鳥は家禽とは違った区分であり、動物園は大空に開放されているためどこも鳥フル対応の限界を感じながら警戒してきた。冬鳥が飛来する季節、大森山でも警戒態勢をとっていたのだが、実際に起きるとは。

とは言え、鳥フルが起きてしまうとその扱いは家禽と同じレベルの対応が迫られる。こうした事情を知れば知るほど、地方の動物園が抱えるにはあまりにも恐ろしい感染症に思え、不安と恐怖が増幅するばかりであった。

市役所内部でも協議、速やかな園の徹底的消毒と休園措置が取られた。マスコミや関係機関との様々な対応、園内対策会議を終え、帰宅の途についたのは未明のことだった。

何とか広がらないようにと念じ続けたが、敵の攻撃は容赦なかった。17日には2羽目のコクチョウが死亡した。感染の拡大を心配してか、動物園の鳥を家禽同様に全処分してはとの声が

私に寄せられた。県内施設での鳥フル発生は初経験、マスコミ報道もあり多くの県民が恐怖を抱いたのは無理からぬことだった。

私の心の揺れ、心配、恐怖はピークに達していた。病院以外に感染が広がったらコントロールできなくなる。感染源がわからないこともあり、対応の正解がわからず正直言って怖かった。鳥フルの怖さは、簡易検査の陰性だけでは安心できないし、死は甚急性にやってくる。まさに見えない敵に手の打ちようがない。コクチョウと少し前までいっしょにいた鳥や感受性の高い家禽含め30羽余の処分を決めた。迷っている時間はなかった。可能性の根を絶つしかない。判断を誤れば最悪の事態が待ち受ける。苦渋の、苦渋の決断であった。

職員に伝えた。病院外で鳥フルが発生したら動物園の鳥は守れない、全殺処分につながる。だから今は病院外での発生を起こさないこと、封じ込めに全力を出しきり、がんばろうと。破れたらもう止められない。安楽死の処分にあたる職員の辛さは痛いほど伝わって来た。

処分後、園内鳥類に異常は見られず、一週間の潜伏期間が静かに過ぎた。スタッフには少しずつ疲れも見え始めていたが、これでやり過ごせるかもしれない。

そう思った矢先のことだった。病院内にいたシロフクロウの幼鳥3羽のうち2羽が急死したのだ。恐れていた院内感染が起きた。

しかし、この時の私にはある種の落ち着きがあった。感染の発生は病院内でのことだったからだ。最初の発生から一週間以上、病院外の発生はなかった。感染場所は病院に限局していた。病院にいる鳥を守り抜くこと、病院での封じ込めでいけるという方針が見えてきた。

偶然にもその時、二人の鳥フル専門の大学教授が大森山に来ていた。病院内生存の老イヌワシなど希少な鳥を生かし続けることを相談した。すぐ答えてくれた「無理だろう」と。感染源を残すことにもなるから処分すべきと。

しかし、病院にいる老イヌワシ他は大森山でずっと生きてた思い入れ深いものばかりだった。簡単には処分できなかった。私は食い下がった。専門家は顔を見合わせ、困ったなという表情だったが、次のような条件を提示してきた。病院内を再度徹底的に洗浄消毒する、一羽ずつの封鎖個室で徹底管理すること、病院内に入った後に出てくる時は、極端に言えば生きた人間以外はださない位の管理をすること、極めて難しい条件であった。さらに生存個体の週一回の採血で抗体価調査、ウィルス培養を4週連続行うことなどの条件も加わった。

現場の担当スタッフはもう鳥を殺さないという強い意志で懸命に対応した。一つ一つ丁寧に、地道な作業を我慢強く頑張る力が統合され鳥たちは助けられた。感染施設内でこうしたことをやり遂げた実績はどうもないらしい。専門家はこの実績を重要なエビデンスとして残しておくべきと称賛した。見えない敵をやり過ごすことになんとか成功したのだ。

その後の園内、病院内での発生はなく、大森山の鳥フル騒ぎは収まった。検査結果が出揃ったのは大晦日前日のこと。現場スタッフの働き、底力には本当に頭が下がった。

今年の夏、夜の動物園は大賑わいだった。たくさん笑顔を見ていると、何もない平穏な暮らしの大切さを改めて考えた。苦しく、恐怖さえ感じた日々があったことを決して忘れてはいけない。動物園があるかぎり。